

植民地朝鮮における中村健太郎と 朝鮮仏教団の活動とその意義

孫 知 慧

The Activities and Meanings of Nakamura Kentaro and
the *Chōsen Bukkyōdan* in Colonized Korea

SON Jihye

This study purposed to explore the activities of Nakamura Kentaro (1880-?) who stayed in Korea during the period from 1899 to 1945 and was deeply involved in the Buddhist circle of the country. Among his many activities, this study was particularly focused on his promotion of the *Chōsen Bukkyōdan*, which continued its activities from the 1920s to the 1940s. Nakamura's activities related to the *Chōsen Bukkyōdan* shows the purposes of establishing a religious organization in a colony and the directions of activities of such organizations. What is more, they expose the real face of the religious policies of the Government-General of Korea, which promoted 'the oneness of Korea and Japan' through Buddhism. Thus, this study attempted to explain Nakamura's view of Korean Buddhism and the meanings of his activities through the *Chōsen Bukkyōdan* based on Nakamura's *Chōsen seikatsu gojunen* (1969) and *Chōsen Bukkyō*, the bulletin of the Joseon Buddhist Mission.

Keywords: Nakamura Kentaro, The *Chōsen Bukkyōdan*, Modern Buddhism, *Chōsen Bukkyō*, *Chōsen seikatsu gojunen*

はじめに

1899年から1945年にかけて朝鮮に滞在し、朝鮮仏教界と深くかかわっていた中村健太郎（1880-?）¹⁾の活動について、とりわけ1920年代からの朝鮮仏教団の事業との関連を中心に提起し考察したい。

中村健太郎は、1899年熊本県の第二期派遣留学生として渡韓し、朝鮮内の日本人官僚や言論界の人物と深く交遊しながら仏教団の運営に努めた。彼の朝鮮内での経験は『朝鮮生活五十年』（青潮社、1969年）で見ることができる。留学生活、『漢城新報』『毎日申報』の主宰、同民会役員、朝鮮仏教社の社長

1) 中村の生没年代は明確に把握できない。ただし彼の『朝鮮生活五十年』（青潮社、1969年）の「出版社のことば」において「昭和四十二年春……八十八才の生涯」という内容から、生年は1880年ごろと推測される。

としての履歴など、その詳しい事情が述べられている。

とりわけ注目されるのは、彼が、1920年代から1940年代まで存続した朝鮮仏教団の事業に尽力したことであり、同書ではその経緯を生き生きと記録している。中村は、団体の結成初期から常任理事として人脈の結成、後援者の模索、機関紙『朝鮮仏教』の発行などに誰よりも尽力した人物である。

1920年の朝鮮仏教大会から始まり、1924年財団法人となった朝鮮仏教団は、1919年9月に赴任した第三代の斎藤朝鮮総督のいわゆる文化統治と歩調をあわせ、「仏教」を通して「内鮮融和」を図った団体である。その活動は、19世紀末の日本諸宗派の朝鮮布教進出とは異なり、総督府が仏教界を直接に管理するようになった1910年代以降の状況を反映している。総督府をはじめ日本政財界の有力者の後援の下、朝鮮仏教大会の開催、留学生の派遣、講演会の開催、社会救護事業など、同団体の積極的活動は朝鮮全国に及んでいた²⁾。

ところが、従来の近代日韓仏教研究において朝鮮仏教団をとりあげた研究は少なく、中村健太郎という人物の朝鮮仏教関連活動も注目の対象にならなかった³⁾。しかし、彼の朝鮮仏教団での活動には、植民地における宗教関連団体の創立目的や活動方向を見せる重要な内容が含まれており、仏教による内鮮融和を標榜した総督府の宗教政策の一端面を見せてくれる。そこで本稿では、中村の『朝鮮生活五十年』(1969年)、朝鮮仏教団の機関紙『朝鮮仏教』の内容を中心に、中村の朝鮮仏教観及び団体関連活動が持つ意義について検討したい。

一. 中村健太郎と仏教

中村健太郎は『朝鮮生活五十年』(新潮社、1969年)、『斎藤子爵を偲ぶ』(朝鮮仏教社、1937年)といった著作を残している。とりわけ自伝的性格の『朝鮮生活五十年』では、19世紀末から20世紀初めにかけて朝鮮で起こった様々な事件、日露戦争、総督府の政策や親日団体の活動、仏教界の動向、太平洋戦争、政財界人事との交遊などの出来事が詳細に述べられている。

(一) 朝鮮語留学生⁴⁾。

熊本出身の中村健太郎は、学生時代に熊本国権団⁵⁾の本部鎮西館の朝鮮会で朝鮮語を学び、1899年7月、第二期熊本派遣留学生として仲間九人とともに渡韓した。中村は、京城の日本人居留地に建てられ

2) 「1941年朝鮮仏教団の三十周年記念式には、香淳皇后(1903-2000)が参加するほどの影響力の持つ団体であった。」
親日人名事典編纂委員会『日帝協力団体事件国内—中央編』(民族問題研究所、2004年)、569-572頁。

3) 朝鮮仏教団に関する先行研究としては、金淳碩「朝鮮仏教団研究1920-1930」(『韓国独立運動史研究』9、独立記念館韓国独立運動史研究所、1995年)、Micah Auerback(ホンウンミ訳)「『新日仏教』歴史学の再考：朝鮮仏教団と1920年代朝鮮에서의 僧侶結婚에 対한 論争」(『亞細亞研究』第51巻第3号、高麗大学亜細亞問題研究所、2008年)を参照されたい。本稿では、先行研究を踏まえた上で、『朝鮮生活五十年』や『朝鮮仏教』所載の論稿、関連人物とかかわる新聞記事などをとりあげつつ検討したい。

4) 「朝鮮語留学生」『朝鮮生活五十年』、9-11頁。

5) 熊本国権堂は、朝鮮内において『漢城新報』『大同新報』の発刊に関わっていた組織である。(佐々博雄「熊本国権堂と朝鮮における新聞事業」(『国土館大学文学部人文学紀要』9号、国土館大学文学部人文学会、1977年)参照。

ていた熊本県立朝鮮語学校の楽天窟の塾に泊まりつつ、朝鮮語、英語、漢文、数学を習った。留学期間は三年で、県庁から修了証書の取得とともに朝鮮で就職する義務が与えられた。中村は日本語学校の臨時教師、京釜鉄道事務所の職人となり、その間、朝鮮の釈迦誕生日、文廟積奠、七夕などの歳時風俗に見る仏教や儒教に関心をもち、日本との類似点を調査した⁶⁾。その後は言論界で活躍するようになり、『漢城新報』の主幹をへて、1910年に徳富蘇峰（1863-1957）との縁で『毎日申報』の監査になり⁷⁾、1922年に総督府高等警察課に転職するまで『毎日申報』『京城日報』の編集責任者を努めた⁸⁾。

（二）仏教との出会い、禪修行

中村が仏教に傾倒するようになったのは、次のような経験があったからである。1915年の正月、中村は、阿部充家（無仏、1862-1936）とともに、姜大蓮（1875-1942）の招待に応じて水原の龍珠寺を訪ねることになった。姜大蓮が阿部を招待した理由は記録としては残っていないが、両者の当時における活動を理解した上で考える必要があるだろう。

姜大蓮は、総督府の三十本山体制の施行とともに、京畿道水原郡の大本山龍珠寺の初代住持となり、1911年から1942年まで9回にわたって再任した。1915年には三十本山連合会事務所の委員長に選出された。彼に対する評価は分れるが、仏教再興のため講学と布教の近代化に努めた人物とされる一方、親日僧を代表する象徴人物として非難される傾向がある。1922年3月26日の鳴鼓逐出事件は、彼を「朝鮮仏教界の大悪魔」と規定した前例のない事件であったが⁹⁾、ともかく当時の朝鮮仏教界において中心的な位置にあったことは確かである。

一方、阿部充家は、熊本出身の徳富蘇峰、野田卯太郎（東洋拓殖株式会社の副総裁）らと交遊しつつ朝鮮言論界に活躍した人物である。第四代京城日報社社長と第三代毎日新報社社長を歴任した彼は、1918年『国民新聞』の副社長に再度就任し、それから「斎藤総督の政策参謀の役目」¹⁰⁾を果たし、総督府の仏教政策に影響力を行使した。日本臨濟宗の本山円覚寺の館長の釈宗演（1859-1919）¹¹⁾から禅学を修得し「無仏」という法名を賜り、朝鮮滞在中には臨濟宗妙心寺派の京城別院で禪修行を行った。阿倍は、中村の「朝鮮青年の崇拜的」¹²⁾という表現のとおり、李光洙、崔南善、崔麟などの朝鮮インテリと幅広く

6) 『朝鮮生活五十年』では「朝鮮風俗の研究」(一)(二)(三)(四)を連載している。

7) 「毎日申報主宰」『朝鮮生活五十年』、57頁。同書には、徳富蘇峰の書簡、写真なども収録している。

8) 中村の履歴に関しては、鄭晋錫『言論朝鮮総督府』(Communication Books、2005年)を参照。

9) 韓東旻「近代仏教界의 龍珠寺住持 姜大蓮」(『京畿史学』6、京畿史学会、2002年)を参照されたい。

10) 沈元燮「阿部充家の 韓日仏教関連活動：新資料「中央学林学生諸君」(1915)「朝鮮仏教の今昔」(1918)의 公開의 더블어」(『韓日民族問題研究』第21号、韓日民族問題研究会、2011年)258頁。同論文とともに阿倍の仏教関連活動に関する研究として、沈元燮「中村健太郎의 「阿部無仏翁을 追慕함」：解説 및 訳文資料」『精神文化研究』33巻、韓国学中央研究院、2010年)があげられる。

11) 釈宗演は、鈴木大拙(1870-1960)とともに度米布教の開拓者として有名である。彼は1911年、1917年朝鮮を訪ね講演会を開催するなど朝鮮布教にもかかわっていた。釈宗演と関係を持った人物として徳富蘇峰、野田卯太郎、阿部充家、夏目漱石らがあげられる。

12) 「阿部無仏翁のこと」『朝鮮生活五十年』、72頁。

交遊し、三十本山住職、青年の間で禅に造詣が深い人物として知られていたという¹³⁾。そのことは次の中村の述懐からもうかがえる。

三十一本山¹⁴⁾住持は、総督招待がすむと必ず無仏社長を訪ねた。そのときは、わたしがいつも通訳兼接待をつとめた。無仏社長のおかげで私も、三十一本山住持と親しくなった。かかる関係から、朝鮮仏教の歴史を調べ、仏教が萎微不振に陥った事情等についても検討することになった¹⁵⁾。

姜大蓮が阿部を招待したのも、このような彼の影響力を意識したためであろう。中村は、1914年12月30日の阿部との龍珠寺訪問について次のように記録している。

姜住持は、この寺には、僧侶養成の堂学があり、二十人ばかりの青少年僧侶が勉強している。先生の御話を聞かせてもらいたいと申し出た。それではお話をしようといって、社長は青少年僧侶のために講話をすることになった……講話は、わたしの通訳の時間と合わせて約一時間のものでしたが、わたしの感心したのは、聴講する僧侶たちの態度の真面目であったことであった。一時間の聴講といえば、相当長い時間であるから普通ならば十二三才の少年僧侶たちには、飽きがきて、坐相が乱れるであろうと思われたが、身じろぎもせず、静粛そのものの態度で、最後まで聴講しておったことである……無仏社長とわたしの寺の正月は、僅かに二日であったけれども、朝鮮に来て初めての経験であっただけに、印象頗る深いものがあつた。わたしは、無仏社長と姜大蓮和尚との問答の通訳をして感じたことは、仏教の研究をして見たいということであった。そのことを無仏社長に相談すると、それはよいことだ、京城には京都臨濟宗妙心寺の別院があつて、後藤瑞巖老師が来ておられるから紹介しようとのことであつた……妙心寺長沙洞別院では毎月一日から五日まで、摂心会が催された。わたしは毎月この会に出席して禅道の修行をすることになった。日曜日は、碧岩録（碧巖録、引用者）、臨濟録などの提唱があつた。また毎月一回無門会という会が、寺院外で催された。知名の士がだんだん参会することになった。その重なる人士には、立花小次郎（立花小一郎、引用者）中將、白水淡少將、阿部京城日報社長、佐々木漢城病院長、工藤京城夫人科病院長¹⁶⁾、深水漢城新報主幹、大村朝日新聞特派員、大庭日本生命京城支店長、渡辺商工会議所会頭というような人が加わっていた。その間鎌倉円覚寺館長の釈宗院禪師が間運宮英宗師等を連れて来錫する等、禅道が

13) 沈元燮、前掲論文、258-259頁。

14) 1911年に朝鮮仏教の三十本山が定められたが、1924年に華巖寺を加え三十一本山となった。中村は「三十一本山」と表記しているが、当時の体制は三十本山の方が正しい。

15) 「朝鮮の仏教」『朝鮮生活五十年』、54頁。三十本山住持任命権を総督府が持っていたので、住持たちは、徐々に総督府政策に順応する傾向が強くなった。

16) 工藤武城は「アイタアイタの三昧境」（『朝鮮仏教』第39号・7月号）などを寄稿している。知られていない人物であるが、近來、崔在穆・金正坤の「日本帝國主義의 公共性 의 한 断面—工藤武城의 「朝鮮儒教—医療」 探究의 低意를 中心으로」（2014年6月、第34次春季韓国日本思想史学会學術大会）の発表において紹介されている。

勃興しだした¹⁷⁾。

中村は、安倍と姜大蓮の朝鮮仏教をめぐる対話や、安倍の講話の通訳をしながら朝鮮僧侶の生活、礼仏、供養の態度に感銘を受けた。自ら「仏教の言葉がはいるので、わたしは通訳に骨が折れた」¹⁸⁾と難しさを打ち明けるほどで、それまで彼は仏教に大きな関心をもっていなかった。ところが、この短い寺院での経験をきっかけに彼は仏教を真剣に学びたいと考え、安倍は彼に臨済宗妙心寺の京城別院を訪ねることを勧めたのである。この別院は、当時の数多くの日本政財界の人士の修行親睦団体でもあった。その別院に足を踏み入れてから中村は、摂心会、日曜講演などに熱心に参加し「三笑」という法名も賜わったのである。

（三）朝鮮仏教団の設立と朝鮮仏教社の社長として

このようにして仏教界と縁を結ぶようになった中村は、1920年代からは朝鮮仏教団の主要人物として活躍するようになる。「内鮮融和」政策を推進した同民会（1924年組織）¹⁹⁾活動をする中で、丁字屋社長の小林源六と丸山警務局長から朝鮮仏教団結成の提議を受け、1925年朝鮮仏教団の実行委員となった。これ以後中村の朝鮮での諸活動は朝鮮仏教団の事業に集中した。1920年代後半からは朝鮮仏教社の社長になり²⁰⁾、機関紙『朝鮮仏教』の発行を主導し、日本と朝鮮の全地域の有力人士と交遊を結びながら団体活動を拡張していた。布教留学生の派遣、社会教化事業を推進し、内鮮融和を第一の原則として提唱した。詳細は彼の『朝鮮生活五十年』に記録されており、同書の目次は次のとおりである。



【写①】 朝鮮仏教社中村社長（中）

17) 「仏事のこと（一）」「仏事のこと（三）」『朝鮮生活五十年』、60-62、65-67頁。

18) 「仏事のこと（一）」『朝鮮生活五十年』、60頁。

19) 「同民会は1924年4月15日京城で結成。1919年3月1日運動後、日鮮融和をかけて反日雰囲気に対抗した組織。主要参加者は朝鮮人資本家や有力者、朴泳孝と宋秉峻らが発起人となり、団体運営費は日本財界の有力者の支援を受けた。機関紙『同民』を発行。日中戦争勃発後、戦時体制下において国民総力朝鮮連盟に吸収された。」（『日帝協力団体辞典—国内中央編』、民族問題研究所、236-239頁参照）。中村の同民会活動は「同民会の設立」（一）（二）（三）（四）（五）（『朝鮮生活五十年』、85-93頁）を参照されたい。

20) [写①]の中村（中央）の後ろに「朝鮮仏教社」という札が見える。（「相馬勝英師と本社長」『朝鮮仏教』第90号・7月号、1933年に収録）。中村の社長就任の正確な時期は確認できない。ただし「昭和四年の薪生を迎ふるに当りて」『朝鮮仏教』（第56号・1月号、1929年）の著者が「社長中村健太郎」と表記されていることから、1930年代以前に社長に赴任したことがわかる。

[表①] 『朝鮮生活五十年』(青潮社、1969年)の目次

<p>蘇峰年賀状 はしがき (中村健太郎) 〔朝鮮生活五十年〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・天国と地獄の継ぎ目 (終戦十八年) 八月十五日の慟哭 ・熊本の先輩と朝鮮問題、朝鮮語留学生 ・佐々木正之先生 ・郡府裁判 ・朝鮮風習の研究 ・仁川沖海戦 ・軍司令官の入城 ・伊藤公の入城 ・京城騒乱 ・寺内総督 ・鵲巢居の詩 ・蘇峰先生と新聞統制 	<ul style="list-style-type: none"> ・朝鮮の仏教 ・毎日申報主筆 ・仏寺のこと ・徳富兄弟のこと ・寺内総督の横顔 ・阿倍無仏翁 ・独立運動と総督政治 ・斉藤総督就任 ・内鮮融和の大団体生る ・同民会の設立 ・朝鮮の心田開発と朝鮮仏教団 ・朝鮮巡講日誌 ・忘れ得ぬ人々 ・丸山鶴吉氏 ・和田八千穂氏 ・斎藤子爵 	<ul style="list-style-type: none"> ・小林源六翁 ・池田清先生 ・大村友人亟氏 ・柳楽達見氏 ・渋沢氏と朝鮮 <p>危機一発 朝鮮独立宣言書 (本文及訳) 高本紫溟先生由来記 (相馬清) 徳富蘇峰著「国民より観たる皇室」 徳富蘇峰先生の書状 田中武雄の書状 内鮮同和の道 (川面凡児) 宮田保氏の歌および俳句 (葉書) 集 あとがき (中村健太郎) 出版社のことば (高野和人)</p>
---	--	---

[表②] 中村の「朝鮮仏教」関連主要論稿

<ul style="list-style-type: none"> ・「朝鮮仏教団の地方発展」『朝鮮仏教』第18号・10月号、1925年。 ・「朝鮮仏教界衰微の主因—大覚国師慶讃会を賛す」『朝鮮仏教』第22号・2月号、1926年。 ・「布教学生の教養と半島仏教の将来」『朝鮮仏教』第24号・4月号、1926年。 ・「朝鮮僧侶の肉食妻帯に就て」『朝鮮仏教』第27号・7月号、1927年。 ・「半島仏教の興隆と朝鮮仏教団」『朝鮮仏教』第44号・12月号、1927年。 ・「朝鮮仏教興隆の気運」『朝鮮仏教』第57号・2月号、1929年。 ・「朝鮮七千の僧侶に警告す」『朝鮮仏教』第59号・4月号、1929年。 ・「朝鮮仏教振興の一方法」『朝鮮仏教』第63号・8月号、1929年。 ・「朝鮮仏教大会の意義」『朝鮮仏教』第66号・11月号、1929年。 ・「汎太平洋大会の朝鮮代表派遣に就て」『朝鮮仏教』第74号・7月号、1930年。 ・「朝鮮寺刹の改善」『朝鮮仏教』第78号・11月号、1930年。 ・「再び朝鮮寺刹の改善に就て」『朝鮮仏教』第82号・3月号、1931年。 ・「金鼎堂和尚」『朝鮮及滿洲』199、朝鮮及滿洲社、1924年。 ・「仏国寺より石窟庵まで」『朝鮮及滿洲』217、朝鮮及滿洲社、1925年。 ・「『朝鮮及朝鮮民族』と世評 (17-20) : 『朝鮮及朝鮮民族』を読む」(1-4) 『朝鮮思想通信』457、朝鮮思想通信社、1927年。 <p>〔伊藤博文関連〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「伊藤公記念の菩提寺建立について」『朝鮮仏教』第69号・2月号、1930年。 ・「再び伊藤公記念の菩提寺建立について」『朝鮮仏教』第73号・6月号、1930年。 ・「伊藤公記念寺建立の敷地に就て」『朝鮮仏教』第75号・8月号、1930年。 <p>〔花祭り関連〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「連合花祭りに就いて」『朝鮮仏教』第49号、1928年。 ・「花祭」『朝鮮仏教』第72号・5月号、1930年。 ・「釈尊誕生奉讃の感」『朝鮮仏教』第110号、1935年。

二. 朝鮮仏教団の主要活動

中村の活動の中で最も注目される「朝鮮仏教団」関連活動は、朝鮮総督府の宗教政策とも深く関わっている。1910年代の武断政治への反発がもたらした1919年3月1日の万歳運動以降、第三代総督に赴任した斎藤は、それまでのような弾圧ではなく「文化統治」を掲げ、懐柔と交渉を通じた親日勢力の養成を図った²¹⁾。前総督とは違って、斎藤は宗教政策を重視しており、仏教界の動向と影響力を注視していた。3月1日運動が天道教、基督教、仏教など宗教団体の結集が重大な役割を果たしたことを念頭に置いていたのである。朝鮮仏教団の設立もまたこの植民統治政策と無関係ではなく²²⁾、総督府の支援の下、活動範囲を広げたという側面がある。

1. 設立の背景と活動の基本理念「内鮮融和」

朝鮮仏教団の前身は、1920年9月設立された朝鮮仏教大会であり、1924年11月に財団法人へ転換、1925年6月に朝鮮仏教団という正式名称が与えられた²³⁾。その経緯について「朝鮮の心田開発と朝鮮仏教団」（『朝鮮仏教五十年』）記述を中心にまとめることにする。

小林源六の招待で京都清水寺の大僧正大西良慶（1875-1983）が京城で講演を行っていた頃であった。朝鮮人仏教徒の李元錫（未詳）が元山から京城まで小林を訪ねてきた。自らの仏教振興運動を説いて小林の後援約束を得た李元錫は、総督府を訪ね斎藤総督の賛同まで得た。のちに斎藤は、大西をはじめ、小林、山口、その他の民間有持を官邸に招待し仏教振興に関する懇談会を開いた。中村の回想によると、この時から心田開発という用語が出来上がり、その後の全国的な心田開発政策に繋がったという²⁴⁾。

1924年9月26日、「東京銀行の倶楽部で清浦圭吾、渋沢栄一、野中高寂（鮮銀総裁）、宮尾（東拓総裁）、市来（日銀総裁）、佐々木（臺銀頭取）、松本（日銀副総裁）、三井、三菱その他の銀行家8人、下村（宗務局長）、古橋（総督府事務官）、道重（増上寺管長）、朝鮮仏教大会の常務理事の李元錫らが会議を行った結果、満場一致で朝鮮仏教団の財団法人組織を結成し、渋沢、野中、宮尾、三人を執行委員に選出」²⁵⁾

21) 「斎藤総督就任」『朝鮮生活五十年』、79頁。

22) 斎藤の宗教界の親日勢力養成政策は、「朝鮮民族運動ニ対スル対策案」（『斎藤実文書』第9巻、高麗書林、1990年、143-151頁）に現われている。「一、寺刹令を改定して京城に総本山を設置、これを以って三十本山の統制制度を造ること。二、総本山の館長は親日主義者にする。三、仏教の振興を促進する目的で団体を設立し総本山を擁護する機関とすること。四、上述した団体は、本部を京城総本山内において、支部を各本山の所在地に設置し、その会長は、居士の中で親日主義者でありながら徳の有する人にする。五、この団体には、次のような事業を行うようにすること。「一般民人の教化、罪人の感化、慈善事業、其他」。六、総本山と各本山及び仏教団体では、相談役として人格の高い内地人を顧問として置くこと」を提示した。（金淳碩『日帝時代 朝鮮総督府の 仏教政策と 仏教界の 対応』、景仁文化社、101頁から引用）。

23) 「朝鮮仏教団は1925年6月13日付の『朝鮮総督処官報』に財団法人設立登記の事実が公示されたが、1940年10月1日から1945年8月までの官報で朝鮮仏教団の解散にかかわる公告が見つけれられないので、解散年度は明確に把握できない。」（金淳碩、前掲論文、128頁）。

24) 「朝鮮の心田開発と朝鮮仏教団二」『朝鮮生活五十年』、95-96頁。

25) 『朝鮮仏教』第6号・10月号、1924年、9頁。金淳碩、前掲論文、131-132頁。

した。

中村にもこの団体の主要委員になることが勧められた。1924年組織された同民会の常任理事の役があったために迷ったが、丸山警務局長との懇談の結果「仏教による朝鮮の心田開発は、内鮮融和の促進に寧ろ拍車をかくることになるであろう」²⁶⁾という結論に至り、受け入れたという。そこで1925年、名称は朝鮮仏教団とし、実行委員、小林、李元錫、中村が推薦された。韓国人としては、団長に李允用、副団長に韓昌洙と前田昇、顧問に朴泳孝、李完用、権重顕²⁷⁾が選出されるなど、親日的性向を帯びる代表的朝鮮人士を包摂していた²⁸⁾。

このような経緯が物語るように、朝鮮仏教団は単純な宗教団体ではなく、総督府の政策、日本と朝鮮の政財界の意向と緊密な関係にある社会団体であった²⁹⁾。その主要後援者を紹介すると次のとおりである。

(一) 小林源六：京都帝国大学を卒業後、三重県で洋服店事業を始めた。その後、朝鮮に渡り1904年京城の南大門近くに丁字屋（美都波百貨店の前身）という洋服店を開業した。中村が「熱心な仏教、真宗の信者」³⁰⁾と紹介しているように、独実な在家信者であった小林は、仏教精神に基づく経営理念を強調し、毎日開店の前には木鐸をたたいたという。小林は、朝鮮仏教団の初代代表として十万円の巨額を寄付し、朝鮮の災害難民を支える救護も行った。『朝鮮仏教』では、彼の論稿とともに毎号に丁字屋の写真広告が載せられている。次の文に、彼がなぜ朝鮮仏教団の創立に積極的に参加したかが読みとれるので紹介しておきたい。

其の後朝鮮の併合が行われまして以来、朝鮮の人々の思想に動揺の傾きがあつて、これを私が仏教の上から窺つたところに依りて考へますと、朝鮮の人には宗教の信仰が無いので、誤られた結果、斯ういふ動揺が起ると私は考へましたので、何とかして、仏教の力を以て救うてあげることは出来ないものかと考へて居りましたところへ、大正九年の秋、元山から今の仏教大会の常任理事李元錫氏が来られまして、京都に仏教大会を起し、仏教を以て鮮人を指導したいといふお話がありまして、それは平素私の考へて居つたことであるから、一緒に行らうといふことになりまして、仏教大会を始めかけたのであります。私は今尚ほさう思つて居りますが、朝鮮の併合といふことは、私共仏教の上から窺ひますと。明治天皇陛下は、絶対の慈悲と、絶対の愛を有つて居られる仏陀……私共の信仰の上から、阿弥陀如来であらせられると思ひます。其の大御心で、社会の文化の遅れたる、そして又周囲の悪魔の手から色々に迷はされて居る朝鮮の人々を併合して、同じ我が日本の国民のやうな幸福なものにしてやりたいといふ慈悲の大御心から出て居るといふことは、私の固く信じて居

26) 「朝鮮の心田開発と朝鮮仏教団二」『朝鮮生活五十年』、95頁。

27) 李允用（1854-1939）は親日団体の仏教擁護会を立てた李完用の兄である。李完用（1858-1926）と権重顕（1854-1934）は、1905年乙巳条約に賛成したとして乙巳五賊臣と呼ばれた人物である。

28) 『朝鮮仏教』第13号・5月号、1925年、61-62頁。役員名簿参照。

29) 「宗教を以て民衆を指導せんとする社会的事業団体である」（前田昇「朝鮮仏教振興の大理想を実現するに努めよ」『朝鮮仏教』第24号・4月号、1926、5頁。）

30) 「小林源六翁」『朝鮮生活五十年』、169頁。小林関連内容は、同書の164-173頁を参照。

る新年であります³¹⁾。

(二) 李元錫：関連資料も少なく生没年代も確認できない。ただし、幾つかの散在する記事を通じて彼の日本協力団体での活動を見ることが出来る。彼は、1920年代初、朝鮮仏教普及会の部会長として活動³²⁾しており、朝鮮仏教大会の財団法人化のため常務理事として「1924年春からは東京に行って、貴族院議長徳川家達、宮内省宗秋僚總裁徳頼倫、渋沢栄一、一部の朝鮮の諸名士にも賛同を求めた」³³⁾という。

(三) 大西良慶（1875-1983）：1914年、京都の清水寺貫主となり奈良の興福寺住職も歴任した。1965年、北法相宗（本山は清水寺）を設立し初代管長となった。日本宗教者平和協議会会長などの仏教界の要職を歴任した。朝鮮仏教団の顧問として、毎年、朝鮮で巡回講演を行うとともに、朝鮮仏教団派遣の日本留学生たちを助力する役割を果たした。彼の朝鮮仏教関連の積極的な活動は「朝鮮巡講日記」（『朝鮮仏教五十年』）から読み取れる。

(四) 斎藤実（1858-1936）：海軍出身。植民地朝鮮における文化統治、「内鮮融和」政策を推進した第三代朝鮮総督である。日韓仏教界の人士たちと交遊し、宗教団体の懐柔を通じて植民統治に念を入れており、朝鮮仏教団の財政的後援のため日本財界の人物を紹介した。彼の支持意向は「本団のために努力せむ」³⁴⁾（『朝鮮仏教』第15号、1925年）からも窺える。

財団法人認可当時の朝鮮仏教団は本部を京畿道京城府長谷川町十七番地に置いて、日本支部は東京、大阪、京都、神戸、福岡に設置すること、朝鮮支部は、1925年9月27日に平壤をはじめ、新義州、大邱、釜山に立てることを決議した。1929年には全国支部がほとんど整備された³⁵⁾。

2. 主要事業

朝鮮仏教団の基本事業は、(一) 講演会の開催、(二) 内地仏教見學員の派遣、(三) 朝鮮人布教師の養成、(四) 各仏教団体との連絡、(五) 機関紙・図書の刊行および研究調査、(六) 慈善・社会事業などがあげられる。

(1) 『朝鮮仏教』の刊行

『朝鮮仏教』は、1924年5月に創刊された朝鮮仏教団の機関紙である。初期には朝鮮語論稿も収録され

31) 朝鮮仏教団設立者小林源六「朝鮮に住み、朝鮮の米を食む—私の感謝生活：朝鮮仏教団が財団法人となれる喜び」『朝鮮仏教』第14号・6月号、1925年、10-11頁。

32) 横心川「民国時期仏教刊行物에 掲載된 韓国仏教史料考察」（『仏教評論』31号、萬海思想実践宣揚会 2008年）を参照。

33) 『朝鮮仏教』第8号・12月号、1924年、10頁。金淳碩、前掲論文、132頁。能仁女子学院の院長赴任記事として「가담부녀의 배흘곳 2」（『東亜日報』、1925年3月23日）も確認できる。

34) 「(前略)……この事業の甚だ必要にして、我々の希望に副うて居ることであるといふことを一言付加へたいと思ふのであります。どうぞ皆様も賛成者として御署名になつて居る方であらうと思ひますが、私も賛成者の一人であります。お互いに充分に努力をして、本団事業の遺憾なく行はれることに努力致したいと思ひます。一言賛意を述べて置きます」（朝鮮総督斎藤実「本団のために努力せむ」、『朝鮮仏教』第15号・7月号、1925年、8頁）。

35) 『朝鮮仏教』第65号・10月号、1929年、50頁。

たが、次第に日本語論稿中心となった。発行人、幹部、筆者もほとんど日本人であった³⁶⁾。中村、小林をはじめ、総督府の幹部、日本人僧侶や学者、一部の朝鮮人仏教徒、布教留学生のほか、著名な鈴木大拙、境野光洋、高楠順次郎、内藤湖南、崔南善、権相老³⁷⁾なども寄稿している。この雑誌は、1936年6月の第121号の発行までは確認できるが³⁸⁾、終刊の時期は明らかではない。ただし、中村の次のように述懐から太平洋戦争中の1940年代初期までは発行されていたと推察される。

機関雑誌朝鮮仏教は、仏教団結成以来、毎月これを発行し大東亜戦争中、用紙の大払底も克服して発行を続け、発行毎々各大学の図書館に寄贈した。私の手許には、十数冊に製本してあったので、京城大学の仏教科教授であった佐藤泰舜先生に寄贈して置いたが、終戦後の混乱で、或は無くなった。大学の図書館に寄贈したものはこれを保存してあれば当時の朝鮮仏教界の動向を展望するに足る資料となるであろう³⁹⁾。

さて、『朝鮮仏教』では、団体の主要事業、派遣留学生の報告、特集号「朝鮮僧侶肉喰妻帯問題批判号」（『朝鮮仏教』第27号、1927年）「迷信打破号」（『朝鮮仏教』第30号、1927年）「聖誕奉祝号」（『朝鮮仏教』第59号、1929年）など、朝鮮仏教界の現実的問題に対する現案を多く取り上げている。中村の「創刊三周年の記念日を迎へて」では、次のように同誌の意義を語っている。

本誌の使命は朝鮮仏教復興の先駆として、第一半島仏教界の事情の紹介である……第二には半島仏教者相互の連絡機関となるのである……第三の使命は、仏教と半島文化との関係を闡明すること……第四の使命は、半島の仏教は、内地仏教の親であった……爾来千有余年の間に、半島と内地との間に仏教による種々の交渉関係を仔細に点検すれば、頗る興味の勇くものがあらう。之が局に当らんとするのも本誌の重大使命である。第五に朝鮮の仏教は、山林仏教、隠遁仏教となってしまった……斯かる状態の仏教をして二千万の大衆と密接なる関係を保たしむる気運に向つて突進せんとしつゝあるのである。第六の使命は、朝鮮僧侶の地位の向上である……第七の使命は、本誌は即ち半島仏教家（内鮮の別なく）活躍の舞台である⁴⁰⁾。

（2）朝鮮仏教大会の開催（1929）

中村は「朝鮮仏教団の事業のうちで最も大きかったのは、昭和四年の春、朝鮮総督府の大講堂及び景徳宮の勤政殿において朝鮮仏教大会を開催したことであった。日本からは、日本仏教の各宗派の館長及

36) 朝鮮人としては、崔南善、李能和、韓昌洙らが関わっていたが、団体の要職は日本人が担い、役員のうち日本人が朝鮮人の3倍に至った。（金淳碩、前掲論文、p133）

37) たとえば、鈴木大拙「寺院仏教より在家仏教へ」（『朝鮮仏教』第21号・1月号、1927年）、内藤湖南「宗教アルコール論」（『朝鮮仏教』第29号・9月号、1928年）などが収録されている。

38) 『韓国近現代仏教資料全集：解題』（民族社、1996年）、19頁。

39) 「朝鮮の心田開発と朝鮮仏教団一」『朝鮮生活五十年』、97頁。

40) 「創刊三周年の記念日を迎へて」（『朝鮮仏教』第37号・5月号、1927年）、3-4頁。

び宗務長その他、朝鮮仏教界からは、三十一本山の住持その他支那からも四五名の高僧知識が参加した⁴¹⁾と述懐している。

この大会は、1929年10月から13日にかけて、朝鮮仏教団、京城仏教各宗連合会、朝鮮仏教中央教務院の三団体が主催となって、総督府庁舎の大ホール、勤政殿および訓練院の前庭で開かれた。『朝鮮仏教大会紀要』によると、斎藤総督の祝辞は、「惟フ二我国ノ現状ハ真摯熱誠ナル宗教家ノ奮起ニ俟ツモノ類ル多シ特ニ思想ノ禪導並ニ内鮮同胞ノ融和ノ如キハ宗教ノ力ニ依リ初メテコレが完璧ヲ期シ得ベシ」⁴²⁾と述べられている。次に引用するのは、中村が朝鮮仏教団の社長として「朝鮮仏教大会の意義」（『朝鮮仏教』第66号）に述べた大会の意義である。

吾人仏教徒は一層の親睦を図り、朝鮮に於ける仏教の普及及び興隆に努め、精神文化の発揚に貢献せんことを期す。此の決議は、三個の重大なる内容と事柄を持つてゐるのであつて、第一は一段の協力親和を図ること、第二は朝鮮仏教の普及及び興隆を策すること、第三は精神文化の発揚に努むることの三点である⁴³⁾。

参加者としては、斎藤総督をはじめ総督府高官、日鮮仏教界の館長及びその代理住持、日本の高僧碩学、さらに円英法師（1878-1953）を含め4-5人の中国高僧、ドイツ代表（日独文化協会主事ドクトル・ウイルヘルム、ゲンデルト氏）などが出席し、日鮮両国の有力者を含め500余人が参加した盛大な大会であった⁴⁴⁾。大会準備のため中村が直接に全国の支部を回ったことは「支部を訪ねて一仏教大会準備のため」（『朝鮮仏教』第63号）に詳しい。



[写②] 朝鮮仏教大会11日午前開会式・総督府大ホール
（『朝鮮仏教』第66号・11月号、1929に収録）

さて、大会の開催において注目を引くのは、金淳碩氏の指摘のとおり「同大会の日程と式順」である。一日目、仏教大会の行事、二日目、殉難横死無縁者追弔会、三日目、博覧会観覧で構成されており、仏教的性格の行事は最初の日に限られたのである。さらに、仏教界の大会にもかかわらず、礼仏儀式ではなく、午前8時に南山の朝鮮神宮に集まり参拝してから総督府庁舎に場所を変えて9時に大会を始めたことも注目を引く⁴⁵⁾。

一日目の開会辞は斎藤総督、代表講演は高橋亨（1878-1967）の「朝鮮仏教に就いて」、そのあと李能和（1868-1945）の「朝鮮仏教總書刊行の急務」などの発表が行われた。二日目は訓練院の庭で殉難横死

41) 「朝鮮の心田開発と朝鮮仏教団二」『朝鮮生活五十年』、96頁。

42) 『朝鮮仏教大会紀要』（朝鮮仏教団、1930年）、36頁。

43) 中村は仏教社の社長として「朝鮮仏教大会の意義」（『朝鮮仏教』第66号、1929年）を寄稿している。

44) 一記者「朝鮮仏教大会後記」（『朝鮮仏教』第66号・11月号、1929年）、6頁。

45) 金淳碩、前掲論文、139-140頁。

無縁者追弔会を開催するなど、実際に仏教関連行事は一日目の講演や声明発表のみであった。大会の開催期間も、昭和天皇即位記念と、総督政治20周年記念の対内外的文化宣伝の性格を持つ朝鮮博覧会の期間（1929年9月12日-10月31日）に合わせられた。

この大会は、朝鮮仏教大会という名を掲げていたが、「日本の文化施策の一環」⁴⁶⁾の性格を持っていた。河村道器は「朝鮮仏教大会私言」において、この大会では、朝鮮仏教界の実際の改善と発展の方向についての方法的議論は行われていなかったと指摘している⁴⁷⁾。また、この大会において「アジア仏教徒の提携の促進、朝鮮全国における民衆的仏壇の安置、京城に内鮮共学の宗教大学の設立」⁴⁸⁾の決議はあったが、それも実行には移されなかったという⁴⁹⁾。

(3) 留学生、視察団の日本派遣

1920年代初朝鮮仏教大会の時から留学生が選抜、派遣され、日本仏教に友好的な仏教徒の養成を推進した。選抜学生は、渡辺海旭（1872-1933）や警務局長の歓送記念挨拶など、多くの期待の中で渡日した。財団法人になるに伴って具体化された選抜基準は「布教学生募集一本団布教学生ヲ左記要項ニ依リ募集ス」（『朝鮮仏教』）の広告によると、毎年選抜が行われており「甲乙兩種に分けて10人以内、エリート階層に限定」⁵⁰⁾されている。彼らの入学、成績、卒業に関する事項や、日本定着の成功事例を紹介する記事も多く収録された⁵¹⁾。

たとえば、中村は「金鼎堂和尚」⁵²⁾の一文を書き、十代で日本に渡り1923年に京都の黄檗宗の仏国寺の住職に選出された金鼎堂を成功的事例として紹介している。また、東京の大本行寺の住職⁵³⁾となった朝鮮人留学生が、教育部から「宗教による内鮮融和」の模範とされたことも記している⁵⁴⁾。在駒沢大学第三回布教留学生の李東熙「我が駒沢大学と私の所感」（『朝鮮仏教』第41号9月号）など、留学生自ら乗せた寄稿文も見ることができる。それ以外にも同誌の「布教留学生近況」「朝鮮仏教団布教学生茶話会」欄に類似する内容が見られるが、これらの情報は宣伝の性格も含まれているので事実にとれほど近いかは判断できない。

これと類似する目的で、仏教団の視察団派遣も行われたが、彼らも帰国後は、機関紙に多くの感想文

46) 金淳碩、前掲論文、140頁。

47) 河村道器「朝鮮仏教大会私言」（『中外日報』1929年11月5日）。金淳碩、前掲論文、111頁。

48) 『朝鮮仏教大会紀要』、朝鮮仏教団、1930年。辻村志のぶ「朝鮮仏教大会（一九二九）と日本の仏教者」（『宗教研究』76、日本宗教学会、2006年）参照。

49) 辻村志のぶ、前掲論文、2006、381頁。

50) 「甲種は日本の専門学校に派遣、卒業後約1年間指定日本寺院で布教師資格実習、18歳以上30歳以下、高等普通学校卒業同等の学歴所持者、乙種は日本の各本山派遣社員で布教士の訓練、25歳以上35歳以下の普通学校卒業同等学歴所持者、僧籍所持者」。「該当学生には、食費、授業料、教科書、制服など、学業に必要な一切を提供、寝具、普段着など日常の雑費は本人負担」。『朝鮮仏教』第21号・1月号、1926年、91頁。金淳碩、前掲論文、144頁。

51) 東京支部佐藤「布教留学生近況」（『朝鮮仏教団の地方発展』『朝鮮仏教』第18号・10月号、1925年）、48頁。

52) 三笑生「金鼎堂和尚」（『朝鮮仏教』第1号、1924年）、（『朝鮮及満洲』199、1924年）。

53) 「一山の住職이 되어있는 前道有望한 青年僧」（『朝鮮仏教』第11号・3月号、1925年）。

54) 「朝鮮の住職さんが又一人」（『朝鮮仏教』第16号・8月、1925年）。Micah Auerback、前掲論文、24頁。

を載せて、日本仏教の先進性を唱え、派遣の意図に符合する結果を与えた。小林と同行した鄭昌朝という人は「内地見学の旅を終へて一余りに内地の風物を喰ひ過ぎた私のお腹」（『朝鮮仏教』第十八号）で、「私達の見地からは、まるで極楽浄土にでも来たやうな感にうたれてならなかった」、「兎に角仏教興隆なることには驚いた」⁵⁵⁾などの感歎を述べている。

（４）講演会

1920年朝鮮仏教大会の設立以来、毎月5回以上に講演会が行われた。財団法人化以前の1924年6月の記事には「講演回数は336回、参席した年人員が68118名」⁵⁶⁾と集計されている。同大会の会長も幹部もほとんど在家人であったため、日本と朝鮮の僧侶や名士を招聘して布教講演を行う必要があった⁵⁷⁾。一般民衆を対象に行う講演会や子供行事（長谷川町（現在ソウル小公洞）朝鮮仏教団舎）もあり⁵⁸⁾、統治政策の次元で総督府の計画の下で行われた講演会もあった。

とりわけ注目されるのは、心田開発運動とかかわる巡回講演である。心田開発運動というのは、1935年宇垣一成総督の提唱により1936年から実施された「国体観念を明微にすること、敬神崇祖の思想、信仰心を涵養すること、報恩、感謝、自立の精神を養成すること」⁵⁹⁾を目的とした政策である。この運動に仏教界が積極的に動員されたのは周知のことである。一般的に農村振興運動とともに盛んになった1930年代半ばを連想するが、中村の話によると1920年代から斎藤総督と日本政治、宗教界人士⁶⁰⁾の内鮮融和意識の延長線上で推進されたという。

『朝鮮仏教』には「大西大僧正巡錫随行記」など、大西の心田開発運動に関する講演が多く記録されており、「大僧正の巡回講演は、概ねわたしが随行して諸般斡旋をした」⁶¹⁾とする中村は、大西の巡回講演日記を『朝鮮生活五十年』に転載している。彼はこの記録を通じて「朝鮮の心田開発が十余年の長歲月に亘りて、執行された当時を偲ぶよすがにしたいと思う」⁶²⁾と述べている。この大西の日記の中では心田開発という用語が頻繁に登場し⁶³⁾、全国各地の多くの大衆が聴講したことがわかる。

55) 鄭昌朝「内地見学の旅を終へて」（『朝鮮仏教』第18号、1925年）、33-34頁。

56) 『朝鮮仏教』第2号・6月号、1924年、2頁。金淳碩、前掲論文、143頁。

57) Micah Auerback、前掲論文、18-19頁。「佛教大講演會」（『東亜日報』、1928年7月4日）。

58) 例えば「童話劇」（『東亜日報』、1926年1月16日）、「어린이날準備會（子供の日準備會）」（『東亜日報』、1927年3月30日）、「讀者慰安童話會」（『東亜日報』、1927年9月17日）などの記事。

59) 政務総監通牒「心田開発施設に関する件」（1936年1月30日付）。青野正明「朝鮮総督府の心田開発運動と類似宗教弾圧政策」（『日本学』第31集、東国大日本学研究所、2010年）、162頁。

60) 「そのころから朝鮮の心田開発という言葉が生れた。そして心田開発がやがて斎藤総督の朝鮮心田開発の政策ともなって大きく打ち出されることになった。」（『朝鮮生活五十年』、94-95頁）

61) 『朝鮮生活五十年』、96頁。

62) 「又同誌に掲載した大西大僧正の執筆された巡回日記の原稿の一部を発見したので、清水寺文庫に納めたが、実に貴重な文献であるから、ここに転載して、朝鮮の心田開発が十余年の長歲月に亘りて、執行された当時を偲ぶよすがにしたいと思う」（『朝鮮生活五十年』、97頁）。

63) たとえば、「『朝鮮巡講日誌一』十月二十八日 晴。午後八時二十分京城発午後二時五分元山着、府内務課長羽野九氏、社会課池田兼良氏、丁字屋清水支店長の出迎あり、丁字屋に投ず、午後七時西本願寺にて講演、後藤府尹開會、心田開発に就いて聴衆三百、李智光君九時前着なれば、十一月二日と約束して此夜丁字屋に宿る。」、『朝鮮生活五十

大西の巡回講演がただの仏教講演ではなく、総督府と朝鮮仏教団の支援下に行われたのは、次に中村が記録した「大西大僧正巡錫随行記（一）」からもうかがえる。

大西大僧正は、入城の翌日、即ち九月二十四日、総督官邸、政務総監官邸、各局部長、朴泳考侯、李完用侯の両顧問、三十本山宗務院、各宗朝鮮布教監督者等を歴訪して初巡錫の挨拶をなし、其翌廿五日には、直ちに錫を平壤に飛ばされた。前田副団長と私とは、二十六日朝京城発の予定となつて居たので、本団より李常任理事（李元錫、引用者）が随行した……大僧正の演題は「人生と信仰」であつた……大僧正は、朝鮮の祖先が、仏教といふ有り難き教えを、日本に伝へ日本に文化の花が爛熳と咲くに至つたことを感謝せられ、今度朝鮮仏教団との因縁によつて、朝鮮に巡錫することになつたのは、報恩謝徳の機会を与へられたのである⁶⁴⁾。

（5）社会救護事業・行事

朝鮮仏教団の事業の一つとして1925年7月大洪水時の救護運動があげられる。大洪水の発生後、朝鮮仏教団は救護物資を募集、「現金2684.80ウォン、鍋1050個などの物品を集めており、白米50席を購入して米袋に「仏の恵」と墨で書いて1千世代に配布⁶⁵⁾したという。避難所設置と全鮮水害死亡者追悼会⁶⁶⁾も開催した記録がみられる⁶⁷⁾。このような役割を果たしたのは、団員自ら朝鮮仏教団はただの宗教団体ではなく、仏教外護団体であり「社会団体」であるという意識が強くあつたからである。下は小林源六の発言である。1920年代にはすでに朝鮮仏教界も多くの変化を経ていた時期だが、彼には、朝鮮王朝時代の廃仏の延長で都会に出られない隠遁仏教のように映つたようである。

朝鮮の仏教は全く隠遁仏教になつて居りますから、各地を行脚して、親しく朝鮮の僧侶と会ひ仏教団の趣旨を充分了解して貰ひたいと思ひます。仏教団は、仏教の外護団でありまして、宗教団体ではないのであります⁶⁸⁾。

さらに興味深い朝鮮仏教団の活動として、朝鮮の歳時風俗、家庭儀礼に対する関与があげられる。
一、「朝鮮伝統の儒教式葬礼風習を、日本の仏教式の火葬に変わろうとし、従来の風水地理論に基く墓

年」、98頁。

64) 中村三笑「大西大僧正巡錫随行記（一）」（『朝鮮仏教』第18号・10月号、1925年）、44頁。

65) 『朝鮮仏教』第16号・8月号（1925年）には、水害救護特集号のように米配給、救護活動、避難所の写真や関連記事が収録されている。金淳碩、前掲論文、146頁。

66) 「津市仏教団主催朝鮮水害死亡者追悼会」（『朝鮮仏教』第18号・10月号、1927年）など。

67) 「可憐한 孤兒를 爲하야」（『東亜日報』、1923年6月12日）「救世軍 育兒院擴張 附屬學校를 新築」（『東亜日報』、1933年12月29日）「水死者追悼会」（『東亜日報』、1925年8月15日）、「孝昌園假家에 病者가 만히나」（『東亜日報』、1925年7月29日）「丁子屋의 沿革과 社業의 發展」（『東亜日報』、1927年5月1日）「讀者慰安童話會」（『東亜日報』、1927年9月17日）。

68) 朝鮮仏教団常任理事小林源六「朝鮮行脚の念願」（『朝鮮仏教』第21号・1月号、1926年）、10頁。

地選定ではなく、日本式の納骨堂に奉安するように葬礼風習を変更させようと計画⁶⁹⁾したことである。京城の市議員の木村百蔵が朝鮮での納骨堂と火葬風習の普及を唱えた「火葬普及と納骨堂の設備」（『朝鮮仏教』第26号・6月号、1926年）などの例がみられる。ただし、火葬普及の提唱がどれほど影響を及ぼしたかは確認できないが、『朝鮮仏教』第14号の紹介文「葬式仏教」の内容を見ると、仏式葬礼の奨励の旨があらわれている。

徳川時代に於ては、赤坊が生まれると、先づ且那寺の住職の厄介になりその教育のためにも寺の厄介になり、而して死んだ時にも亦寺の厄介になり、死後は云ふまでもなく、永遠にお寺の世話にならねばならず、寺院と民衆の生活とは終始離るべからざる関係を持つて居たのであつた。維新以後明治政府は、一時廢物毀積の策を弄したけれども、その不可なることを悟つて此の政策を放棄し、現金では寧ろ宗教利用の方針を取るやうになつた。近来基督教徒が、社会的事業のために可成目覚ましき活動をなすに反し、仏経側が余り動かず、徒らに葬式を扱ふのみを能事として居ると云ひ、不遠慮にも「葬式仏教」の罵言さへ浴せかくる者がある位である。併しながらよく考へて觀るに、仏教が人生の一大事たる死—葬式—と離るべからざる因縁を保つて居ることは、極めて結構なこと、と思ふのである。朝鮮の仏教が、李朝の極端なる排仏政策の犠牲となつて、僧侶が人間の葬式を司ることさへも能はぬ現状に在り、その生前に於ても死後に於ても、全然民衆の生活と没交渉となり了つたのは、朝鮮仏教のためにも朝鮮の人々の社会的生活のためにも如何に悲しむべきことであらうぞ。今日内地では仏式結婚さへ行はるゝ時代である。我々は朝鮮に於て、須らく先づ仏式に依りて葬儀を行ふことを奨励すべきであると思ふ⁷⁰⁾。

二、仏教式結婚の奨励、宣伝である。『朝鮮仏教』第39号・7月号（1927年）では「仏式結婚の盛行—濟州島に行はれた仏婚式」という記事と写真が載せられている。濟州島布教堂で行われた仏式結婚であり、その紹介文と式順も収録されている。韓国の一般的風習とは異なる珍しい様子なので『朝鮮仏教』の収録写真を示しておきたい⁷¹⁾。

近来各地の教堂に於いて、仏式結婚が盛行されてゐるのは即ち朝鮮仏教の復興、歴史的文化の表現である。斯ゝる現状な仏教の民衆化、仏教の生活化家庭化と云う意義に於いて甚だ意義深重なりと言わねばならぬ。就中濟州島の仏教布教堂に於いて去陰三月初八日挙行された仏式結婚の式順を見るに次の如くである……夫吳達準（印）、配文蓮実（印）、照明法師濟州布教師李晦明⁷²⁾（印）……

69) 「仏教大会実行安細目に亘つて決定す」（『朝鮮仏教』第8号・12月号、1924年）、11頁。Micah Auerback、前掲論文、23頁から引用。

70) 「葬式仏教」（『朝鮮仏教』第14号・6月号、1926年）。

71) 「ㄹ（初）仏教式結婚式」（『京響新聞』、1970年11月18日）と特筆しているように、1920年代の仏式結婚は異例的であり、当時どれほど仏式結婚が盛行し奨励されたかに対する研究の余地があると思われる。

72) 「李晦明（未詳）は、濟州の近代仏教を重興させた僧侶とされる。濟州島仏教界は、観音寺と法井寺の抗日履歴で1924年まで公式的活動は中止された。その後、総督府は、文化政策の基調に応じて1924年に李晦明を立てて濟州島

(後略)⁷³⁾



【写③】 仏式結婚式
(済州布教堂、一九二七年(陰) 三月初八日)



【写④】 朝鮮の花祭り(京城朝鮮銀行前の広場)
『朝鮮生活五十年』、『朝鮮仏教』第73号。

三、朝鮮の初八日(釈迦誕辰日)行事を「日本の花祭りを混ぜ合わせ広げたこと」⁷⁴⁾である。片茂永氏は、『朝鮮仏教』にみる初八日記事を取りあげ、総督府や地方の官が関与している背景について「大東亜共栄圏の基調の上に仏教文化を重ね合わせ、東アジアを順従させようとした当時の日本の戦略であった。そうした日本のアジア的文化政策は、西洋文化の代名詞的なものであるクリスマスに対抗するため、釈迦の誕生日を国際慶祝日として認定させようとして奔走したことにも表れている」⁷⁵⁾と説明している。

中村の花祭りに関する文章を見ると、彼は「連合花祭りに就いて」(『朝鮮仏教』第29号、1928年)では、日本全国で盛んである花祭りを京城でも開催することを提唱しており⁷⁶⁾、1930年代以後になると、「釈尊誕生奉讃の感」(『朝鮮仏教』第110号、1935年)に見るように、初八日を迎え、非常時局下における社会安定に関する発言をしており、1936年6月の京城将忠壇公園での花祭りを紹介する記事の小題は「特に心田開発方針に順応して」(『朝鮮仏教』第111号)と付けている⁷⁷⁾。1930年代中期から多くの朝鮮知識人や僧侶も、心田開発講演や行事に動員されたが、初八日も「花祭りとしての脚色を経て朝鮮民衆の思想教育に利用」⁷⁸⁾され始め、教化に用いられたといえる。参考に次は『朝鮮仏教』(第70号、1930年)に

知事が関与している済州仏教協会を結成させ、済州仏教は活動を再開するようになった。済州仏教協会は、日帝の主導下に済州社会の有力者たちが大勢参加する社会団体であった。」(ハンクムスン「近代済州仏教史研究」(済州大学博士學位論文、2010年)参照)。三笑生「大覚院と李晦明和尚」(『朝鮮仏教』第31号・11月号)を参照。

73) 「仏式結婚の盛行—済州島に行はれた仏婚式」(『朝鮮仏教』第39号・7月号、1927年)、40-42頁。

74) 片茂永は、「日帝下における朝鮮の四月初八日(1)」(『文明』21(11)、愛知大学国際コミュニケーション学会、2003年、61頁)において「朝鮮伝統的な初八日の風習に日本版四月初八日である花祭りが混ぜ合わせられる可能性」を推測している。

75) 片茂永、前掲論文、60-61頁。1925年11月1日、東京の東亜仏教大会での決議案「大聖釈尊降誕の聖日を期し、仏教徒は一斎に降誕祭を行なひ之を以て全人類の風俗たらしめんとことを期す」(「東亜仏教大会の経過」『支那時報』第3巻第6号、東亜支那時報社、1925年12月)。

76) 中村健太郎「花祭」(『朝鮮仏教』第72号・5月号、1930年)。

77) 片茂永、前掲論文、69頁を参照。

78) 片茂永、前掲論文、69頁を参照。

収録されている「花祭の意義」の内容であり、花祭りの重要な役割が「内鮮老若男女の一丸化」とされているのがわかる。

花祭りの意義は今更呶々するまでもなく、我々人類の大恩教主釈迦牟尼の降誕を祝し……特に我朝鮮半島にあては、それ以外の重大なる意義が含まれてゐることを忘れではない。即ち、この日こそ我々仏教徒は常日頃のそれにも増して、更に心のどん底から打ちとけ、内鮮老若男女は打つて一丸となり千数百年来共に奉じ来れる同じ崇敬の対象、釈尊の子として互ひに相抱き、渾然兄弟愛のるつぽに溶け入れるのである。我等はこの花祭りをして最も重要視し、内地仏教徒のそれに倍する所以は、実にここに存するのであって、又かるがゆるに内地のそれよりも更に盛大ならんことを切望するのである⁷⁹⁾。

三. 植民地における宗教関連団体の活動とその意義 —中村健太郎と朝鮮仏教団の日鮮融和の推進と限界

このような朝鮮仏教団の多方面にわたる活動は、朝鮮全国の有力者を包摂し民衆にも勢力を拡大していたが、その一方、あまりにも日本仏教の優位を表明する傾向が強くなったため、『朝鮮仏教』誌面上の論争も現れた。その推移の背景について、中村の言及を中心に考えてみたい。

1. 朝鮮仏教に対する基本認識「衰微」「不振」

中村、小林を含め多くの朝鮮仏教団関連人物の発言において、朝鮮仏教の現況は、僧侶の無知、教育制度の不備、信徒との距離感、山林仏教、自立不可能の状態と特徴つけられている⁸⁰⁾。朝鮮仏教団財団法人化の記念式の祝辞として載せられた京畿道知事の時実秋穂の「朝鮮精神界の開拓に努めよ一本団披露会席に於て」を見ると「朝鮮の現在を救う方法の、一つの主な事項は宗教の精神を吹込むといふことである……朝鮮の仏教は、制度の為めでもありませんが、今日甚だ萎微振はない状況であります⁸¹⁾」と述べられており、同誌では、朝鮮の仏教芸術や布教状況を否定的に描く傾向が強かったといえる。

中村を仏教界に導いた阿倍の場合、「中村君、朝鮮の仏堂は、萎靡不振に陥っているが、仏教の精神がミヤクミヤクとして残っている⁸²⁾」と肯定的な見方を見せたが、その朝鮮仏教の底力は、自らは活かすことが難しく、日本仏教の助力によって発揮できるという意識が含まれていた⁸³⁾。

79) 「花祭の意義」（『朝鮮仏教』第70号・3月号、1930年）。中村は「花祭」（『朝鮮仏教』第72号・5月号、1930年）において、花祭の意義を、一、仏教の宣伝と信仰の進歩を利すること、二、社会心理の一伝機を劃すること、三、社会的親善に効力あること、この三つをあげている

80) 『朝鮮仏教』創刊号には、中野高淑が「内鮮仏教徒は同一な仏弟子である」（『朝鮮仏教』創刊号・5月号、1924年）において、「朝鮮の仏教はすでに滅びた」と断言している。

81) 時実秋穂の「朝鮮精神界の開拓に努めよ」（『朝鮮仏教』第15号・9月号、1925年）、9頁。

82) 『朝鮮生活五十年』、60頁。

83) 阿部の朝鮮儒学・仏教観については、「阿部無佛翁を偲ぶ（二）二、翁と貴族社会、三、翁と朝鮮儒林」（『京城日

中村は「朝鮮仏教界衰微の主因—大覚国師慶讃会を賛す」(『朝鮮仏教』第22号)において、「独り朝鮮の仏教界は、復興の旗幟を立て、から十有余年の歳月を費して来たにも拘らず、今尚ほ何等復興の迹がないと云ふのは、不思議な現象と謂はねばならぬ⁸⁴⁾」といい、その衰退の原因として、五百年間の弾圧の余弊、僧侶の腐敗、寺院財産や権力争い、一般民衆の信仰心の欠乏の問題をあげた上で、もっとも主要な原因は「一般僧侶の(祖師)祖先尊崇心の欠乏」であるという。

このような見方は、留学生派遣政策においても現れる。中村は、留学生派遣の趣意説明において、日本の仏教教育機関に対する自負心と、これとは対照的な朝鮮仏教の教育機関の不備と人材の不足を強調している。「現金朝鮮仏教不振の原因は、種々あるであらうが、人物の払底といふことが何よりも重要な問題である……然るに今日仏教教育機関の尤も発達せるは、日本其地を措いて他にはない⁸⁵⁾」と述べている。さらに彼は「半島精神界の荒廢⁸⁶⁾」という問題意識も強く持っていたため、「無宗教、無教導、無慰安の状態」の朝鮮民衆の「精神的、宗教的缺陷を救療⁸⁷⁾」すべきであり、この問題を仏教界から解決して行くという立場を取っていた。

これに反して朝鮮僧侶の権相老は「朝鮮と朝鮮仏教」(『朝鮮仏教』第21号)において「尤も仏教は朝鮮に輸入されて以後、一切が朝鮮の民族性又は習尚に似合ふ様に変化して、世界仏教中に於いて朝鮮仏教は最も其の特色を顕露して来たのである⁸⁸⁾」といい、朝鮮仏教の肯定的な面を述べている⁸⁹⁾。

要するに、中村も、権相老のような朝鮮仏教徒も、朝鮮仏教の復興を唱えるのは同じであったが、改革を推進しつつ仏教界の変化を図ろうとした朝鮮仏教徒に反して、中村の場合は、朝鮮仏教の自立能力を認めるよりも、保護と救援の対象と見なしたことに差があったといえる。

2. 「内鮮融和」を標榜した差別化

このように朝鮮仏教に対する否定的発言や日本仏教化を強調する内容が続くと、自然に反駁の意見も出された。記者の安錫淵は「吊故鄭昌朝君」(『朝鮮仏教』第26号・6月号)において次のように団体活動の反省を促す話を述べている。

朝鮮仏教団が組織され仏教雑誌が発刊さるゝや、随つて半島宗教界は無限光明を普放するだろうと想像し、随喜に堪へなかつた。然し朝鮮仏教誌は余り好感を与へられなかつたと云ふのは、個人の愚見であろうが、「朝鮮仏教」と題し朝鮮仏教の復興を唱へながら、而も朝鮮の僧侶とは、提携せ

報』、1936年1月15日)。「阿部無佛翁を偲ぶ(三) 四. 翁と朝鮮佛教の復興」(『京城日報』、1936年1月16日)を参考されたい。(沈元燮「中村健太郎의 「阿部無佛翁을 追慕함」」、175-176頁)。

84) 「朝鮮仏教界衰微の主因—大覚国師慶讃会を賛す」(『朝鮮仏教』第22号・2月号、1926年)、7頁。

85) 中村三笑「布教学生の教養と半島仏教の将来」(『朝鮮仏教』第24号・4月号、1926年)、2-3頁。

86) 中村三笑「半島仏教の興隆と朝鮮仏教団」(『朝鮮仏教』第44号・12月号、1927年)、3頁。

87) 中村三笑「伊藤公紀念の菩提寺建立に就て」(『朝鮮仏教』第69号・2月号、1929年)、4頁。

88) 権相老「朝鮮と朝鮮仏教」(『朝鮮仏教』第21号・1月号、1927年)、22頁。

89) 『朝鮮仏教』に寄稿した朝鮮仏教徒の論稿としては、東京帝国文学部史料編纂員金泰治の「宗教発生と社会事業に就いて」(『朝鮮仏教』第26号・6月号、1926年)、東京金素荷「朝鮮仏教専門学校設立に就いて」(『朝鮮仏教』第24号・4月号、1926年)などがあげられる。主に仏教近代化・啓蒙のための反省や対策を論じる文章が多いのである。

ず、握手を欲しても居ない。又は朝鮮人を本位とせずして、投稿や購読方までも日本を土臺としてゐる。否此点に就いては、鮮人は因襲的暗味で、雑誌の緊重なる事を知らないから自発的に金を出して購読しないのが原因でもあらう？然し朝鮮仏教誌が営利的でなく、教化的であり、日本より朝鮮、支那、印度を報本逆化せしめんとする意思ならば、無限の心力冒険と、無限の経済損害を受けなければ、出来ないのである。此等本懐を顧みずして、唯日本の便宜を取るとするならば、此れ所謂「担水買江辺」である。盲人の掩目は寝ても醒めても同様ではないか⁹⁰⁾。

これに対して当時の雑誌主筆であった川村五峰は「朝鮮仏教団と「朝鮮仏教」のために一安錫淵君その他の人々に」（『朝鮮仏教』第17号・7月号、1927年）において、朝鮮仏教団は、朝鮮人のために創立した団体であり、団員たちは朝鮮の有志や僧侶との提携を進めようとしたが、それに応じて協力してくれなかったのは朝鮮側であると反駁した⁹¹⁾。

彼が朝鮮仏教に関心を注いだことは、数か月後に掲載された「仏教代表の民国訪問と朝鮮—内地仏教に抗議す」（『朝鮮仏教』第30号・10月号）からも見ることができる。彼は、1926年東京の東亜仏教大会以後、親善のため中国仏教訪問を計画するにおいて朝鮮仏教徒を排除した事実について、日本仏教界に強く抗議している。

今回内地仏教に於て、訪支代表団を組織するに当りて、吾が朝鮮仏教が、何等の交渉案内をも受けなかつた一事である。是れ果して如何なる理由なりや、吾人の甚だ怪訝に堪へざる処であつて、斯くの如きは、内地仏教が、全然吾が朝鮮仏教を眼中に措かざる結果であると解釈せらるゝも、恐らく弁明の辞があるまいと思ふ。是れ誠に朝鮮仏教として、看過し難き大なる恥辱であらずして何であらうか。実に吾等を軽侮するも亦極まれりと謂ふべきである……何故前以て「今度吾々が支那を訪問する事になつたが、お前達も一緒に同行しては何うか」と誘つてはくれないのか。朝鮮は今や外国では無い、立派な吾が帝国の一部であつて、全く内地同様であるにも拘らず、如何なる理由の下に吾々を閑却し度外し、而して継子扱ひをしたのであるか。口に頻りに内鮮融和を唱へながら、其の行為に於て全然考慮の裡に置かざるが如き態度あるは、甚だこの意を得ない。吾人は朝鮮仏教を代表して、内地仏教に対し、嚴重なる抗議を提出し、明確なる弁明を聴かむとする者なり。（大正一五年、九、二三、記）⁹²⁾

この文章において興味深い内容は、彼が「朝鮮は今や外国では無い、立派な吾が帝国の一部であつて、全く内地同様であるにも拘らず、如何なる理由の下に吾々を閑却し度外し、而して継子扱ひをしたのであるか」⁹³⁾ という発言である。この内容は、日鮮仏教の間には、「内鮮融和」を標榜してはいたものの朝

90) 安錫淵「吊故鄭昌朝君」（『朝鮮仏教』第26号・6月号、1927年）、38頁。

91) Micah Auerback、前掲論文、32頁。

92) 川村五峰「仏教代表の民国訪問と朝鮮—内地仏教に抗議す」（『朝鮮仏教』第30号・10月号、1927年）、4-5頁。

93) 川村五峰、上掲論文、1927年、5頁。

朝鮮仏教界に対する差別が行われたこと、また、川村の朝鮮仏教代弁の根底にある「我が帝国の一部」意識を語ってくれるのである。

3. 植民地統治政策との関係

朝鮮仏教団の活動は、植民地における宗教と政治の結合を見せる好例といえる。団体の名称とは距離があって、朝鮮よりは「日本」、出家者よりは「俗人」、宗教団体よりは「社会団体」の性格が強く、なによりも総督府の宗教政策と方向を共にしていた。

1920年代の斎藤実、1930年代の南次郎、宇垣一茂の統治において、一貫して仏教は「内鮮」の融和のため活用されており、朝鮮仏教団はもっともその役割を充実に実行した団体であった。

朝鮮仏教団の主要事業であった1929年の朝鮮仏教大会が、総督府の官邸で総督府が主催した朝鮮博覧会の期間中に開催されたことも、そのような性格を語ってくれる。また、前述した初八日行事も、1930年代の宇垣総督の心田開発運動への動員に活用されており、『朝鮮仏教』ではその様子を詳細に伝えており、中村は積極奨励する立場を見せているのである。

1930年代からの『朝鮮仏教』には、より強く総督府の植民地政策を反映する傾向を見せており、「国家神道、天皇崇拝の推進」⁹⁴⁾が行われている。『朝鮮仏教』第103号・104号(1934年)には、池田警務局長の推薦文が付けられた朝鮮総督府内務局小山文雄『神道と仏教』(朝鮮仏教社発行、1934年)という著書の広告も載せられている。

一方、興味深い論稿として、当時朝鮮の名僧と知られた禅僧を訪ね、その訪問記を『朝鮮仏教』に収録したことである。たとえば、(一)「池田警務局長方漢巖禅師を訪る」『朝鮮仏教』(第101号・8月号、1934年)、(二)「白龍城師を訪ねて」『朝鮮仏教』(第89号・6月号、1933年)、(三)「宋萬空禅師と一問一答」(『朝鮮仏教』第105号・12月号、1934年)などである。白龍城(1864-1940)、宋萬空(1871-1946)らは、抗日的性格を持ち、三十本山住持たちとは相反する立場の禅学院の運営を主導した禅師と知られている⁹⁵⁾。彼らを、朝鮮仏教団の記者や任員が訪ね、朝鮮仏教界の現況や禅に対して対談し、それを記録として残したのである。

朝鮮仏教団は、駒沢大学出身の相馬勝英を梵魚寺の朴漢永や月精寺の方漢巖の下に留学させるなどの日鮮仏教学生交流を進めており、池田は方漢巖に「朝鮮仏教の振興には、青年僧侶養成の必要なことを一時間余にわたって懇談された」⁹⁶⁾という。しかし、池田警務局長と中村健太郎らが方漢巖を訪ねた記録の最後のところには「如何に捨身沙門の身とは云へ永い間仏教に対する社会的蔑視を体験して来た漢巖師としては、今日の警務局長との会見は恐らく生涯忘れ得ぬ感激の一齣であったこと、思ふ」⁹⁷⁾とあるが、この一文から、彼らは、方漢巖の真意はどうあれ、朝鮮仏教を蔑視から救ったという意識を持っていたのであり、それを読者に伝えたかったことがうかがえる。

94) 岩谷めぐみ「植民地時代の雑誌『朝鮮佛教』をめぐって：朝鮮総督府との関係」(『立教大学日本文学』(111)、立教大学日本文学会、2014年)、270頁。

95) 呉京厚「日帝下禅学院의 設立과 中興의 背景」(『東方学誌』136、延世大国学研究院、2006年)を参照。

96) 「池田清先生を憶ふ」『朝鮮生活五十年』、185頁。

97) 「池田警務局長方漢巖禅師を訪る」(『朝鮮仏教』第101号・8月号、1935年)、5頁。

中村のあらゆる発言には、「朝鮮同胞の幸福、利益、及び進歩を企図する点に就いては、吾人亦決して人後に落つるものにあらざる決心と自信を有するものである。」⁹⁸⁾のように、朝鮮仏教に対する関心と考慮を表している。彼の朝鮮仏教団活動の低位にあったものが、彼なりの朝鮮仏教に対する憂慮と善意であったと強調している。前述したような否定的な発言のみしたのではなく、日鮮仏教が共に発展することを期待する趣旨の文章も多く載せている。

しかしながら、その「内鮮」親和の意識が、総督府の植民地政策と結び付けられていたこと、朝鮮仏教徒たちの自立的発展可能性を否定する前提の上で仏教団の事業を進めたこと、朝鮮仏教徒には運営の主導権を渡せなかったことが限界となり、朝鮮仏教徒の好感と支持はほとんど得なくなっただと思われる⁹⁹⁾。

おわりに

以上、本稿では、中村健太郎の朝鮮仏教団関連活動を中心に考察してきた。中村は、「天国と地獄の継ぎ目（終戦十八年）」（『朝鮮生活五十年』）において、終戦後の京城の急変した町と朝鮮人に対して虚無感と当惑感をあらわしている。朝鮮仏教団も、中村の回顧によると、1940年代初期までは存続したと推測されるが、その後は関連記録も確認できなく、1945年前後で活動中止を迎えたと思われる。

中村が心血を注いだ朝鮮仏教団の事業は、機関誌『朝鮮仏教』の発行、社会救護事業、朝鮮仏教大会の開催、留学生派遣、巡回講演会など多方面に渡っており、京城だけではなく地方支部まで及んでいた。さらに、仏教式結婚¹⁰⁰⁾と葬礼の奨励、朝鮮初八日の花祭化、心田開発運動の宣伝を通じて、朝鮮民衆に日本式仏教を普及し、生活化を図ったことも確認できる。その活動は、総督府の植民地政策とも内鮮融和の推進という面に関わっていた。朝鮮仏教団は、創立当時から総督府の支援を受けており、1930年代からは『朝鮮仏教』において総督府の政策を反映する論稿がより多く掲載されている。

結局、朝鮮仏教団は、朝鮮と日本仏教界の親和、友好的態度の養成に成功できなかったと評価される¹⁰¹⁾。その主な要因は、中村の発言にみられるように、朝鮮仏教の「不振」「衰退」の面を強調し、自生能力を否定的に見なしたため、朝鮮仏教徒の反感を得たこと、また朝鮮仏教の潜在力と発展可能性を唱えながらも、仏教振興活動にかかわる主導権を朝鮮仏教徒には渡さなかったことに限界があったと思われる。中村の『朝鮮生活五十年』や『朝鮮仏教』において取り上げなかった内容については、今後の課題としたい。

98) 「朝鮮七千の僧侶に警告す」（『朝鮮仏教』第59号・4月号、1929年）、3頁。

99) 「被等資本閥（日本政府を指す）은 宗教機關을 자기 階級の 御用機關에 使用하여 其 欺瞞政策을 行하고 있는데, 朝鮮仏教團은 日本帝國主義의 走狗輩를 網羅하여 日鮮融和를 唱하고 民衆을 欺瞞코저 한다. 吾人은 其 正體를 暴露하지 않을 수 없다는……（後略）」（『咸北道聯盟事件豫審決定書全文、四』『東亞日報』、1930年3月10日）

100) 仏教式結婚は、李能和が『朝鮮仏教通史』（新文館、1917年）で、言及したことがある。その他、檀国大学校東洋学研究院『朝鮮総督府機関紙『朝鮮』所在一婚礼와 葬祭礼』（チエリョン、2013年）の李能和の論稿を参照されたい。

101) Micah Auerback、前掲論文、19頁。